

ろう教育の研究動向と課題の検討（其の二）

三宅宗雄*・須永朝子

The tendency of the studies on the deaf-education in Japan
and the discussion about these subjects (II)

MUNEO MIYAKE and ASAKO SUNAGA

第三章 教科に関する研究

国語、数学、図工、律唱、職業の各教科に関する研究の半数は職業科関係で占めている。特に之等各教科の基礎的なものとして最も重要な国語科に関する研究が案外少い。これは恐らく言語指導に緊密な関連を持つ関係で言語指導の研究に包含される面が大きいので、国語科としての研究が目立たなくなっているものと解される。

第一節 国語指導

人と人の繋がりを持つために言語が用いられ、又、文字や絵画などが使われる。言語なり文字なり、其の何れにおいても、広い範囲の人々に自己の表現しようとする意思を正しく伝えとともに、他人の意思を正しく理解する事の上にも必要である。

この目的を達成せしめる為に教科として国語指導があるわけである。而も其の習得の方法として当然、視覚、聴覚が利用される。

然るにろう児の場合は言語なり文字なりを習得するのに不可欠な視覚、聴覚中、殆ど視覚に依らなければならぬ点で、言語指導の場合と同様、国語指導においても非常な困難を来すものである。

従って本項に関する研究としては、其の困難性を如何にして打破するかと言う技術面の研究が中心になっている。堀川氏⁹⁾は国語学習の在り方として、先ず話す力、即、言語発表の意欲と態度を培い、次に文字に対する修練や文章構成力を養うべきだと。他の人々の多くもろう児に於ては視覚に加えて、残存聴力や触覚をも併せ利用し、言葉についての関心と興味を誘発し、然る後に読話、発語の正しい能力を養い、更に読み書きえと発展せしむべきだとの見解である。

勿論其のためには国語による思考を容易ならしめる経験や環境の整備充実が必要である事は言う迄もない。

巻山氏²⁾は国語教育課程を職業科中心に設定し将来の社会生活を少しでも可能にすべきであると。国語科カリキュラム資料⁵⁾によれば、使用語彙数を小学1年150～250語、2年400～600語、3年800～1000語、4年1200～1500語、5年1700～2000語、6年2200～2500語を目標とする事を指示している。

又、巻山氏²⁾は国語能力別学級の編成を説いて、更に全文板書法の有要性を述べている。浅野氏はろう児の生活実態と欲求に応じた教材の選択を重視し、一律的な単元学習や教科書学習に捉われないよう注意を促している。

宮寺氏⁶⁾は特に疑問詞、疑問文の指導について述べ、其の問いかける面白さを感じさせ、疑問を喚び起さす工夫の必要性を強調するとともに、其の問いかけの場を正しく理解せしめるよう努むべきであると言う。

尚、西田氏⁶⁾はろう児は漢字能力が特に劣ると言っている。

次に読みに対する問題としては、斎藤氏⁸⁾は本来ろう児は其の性向が偏狭的に傾き易いので、広く一般社会の実情を知らしめるため、出来るだけ語彙の拡充と読書能力の向上を図るべきであると。猪股氏⁹⁾は言語表現は話す事と書く事であり、言語理解は読む事と聞く事であるとしている。

次に荒木氏¹⁰⁾は読話テストの結果から見て、ろう児は文字の形態のみに心を奪われ、文章の意味的表示を読み取る事が難しい。例えば文字其のものは知っているが、読話が出来ないため、文字表現の出来ない者、或は読話は視覚的に出来るが、調音要領の理解が不正確なため、文字表現に誤りのある者などを挙げている。

又、西田氏¹¹⁾は映画「エヴェレスト征服」観賞後の作文による調査成績を一般児童の場合と比較し、ろう児には形容詞、副詞の如き修飾語が非常に少い事や全体としての内容の把握が劣っている事を報告している。

* 京都府立大学文家政学部児童学

遠藤氏¹²⁾はろう児の文章表現における誤りを収集し、音韻では清音と濁音の混同が最も多く、次に同口形異音の誤りが多いと。尚、概念語、陳述語、関係語などに就ての誤りをも検討している。

考察

国語指導は研究数からすれば言語指導に比べて遙に数少ないものであり、ろう児に対する国語指導が極めて困難であると共に其の進展が阻まれている事を痛感する。

今日ろう教育が言語指導殊に発語指導に重点を措いて、国語指導が二義的に扱われている事が、こうした困難と進展の阻まれている大きな理由ではなかろうか。

我々は発語指導よりも、寧ろ目読や書字を中心の国語指導をろう教育の第一義的に採り挙げるべきでなかろうかと思惟する次第である。

聴覚残存児は別として、残聴能力のないろう児に対しては発語指導よりも、飽く迄、視覚による読字能力の獲得に全力を注がしむべきでなかろうかと考える。

発語による真の言語は聴力を通じて賦与されるものである。聴力を通じず、視覚や触覚などによって獲得した発語は、決して人間としての言語発声ではない。

ろう児に対して目読や書字の教育を主眼とする事により多くの有益な研究の道の拓かれる事を期待するものである。

更に、国語教育は幼児の早期から開始すべきである事も大切な事である。

主な参考文献課題

- 1) 国語学習のあり方についての私見 (堀川)
- 2) 中学部、高等部における国語教育 (巻山)
- 3) 国語科における問題解決の学習態度をどの様に指導すべきか (浅野)
- 4) 国語指導の展開例と疑問詞、疑問文の指導方法について (宮寺)
- 5) 国語科カリキュラム資料
- 6) 本校における中、高等部国語能力の問題 (西田)
- 7) 読みの教育的意義 (北野)
- 8) 本校における読書能力の診断 (斎藤)
- 9) 入門期における読みの指導 (猪股)
- 10) 文字指導の進め方についての一考察 (荒木)
- 11) 中学部生徒の作品 (西田)
- 12) ろう生徒の文章表現における誤りの諸傾向について (遠藤)

第二節 算数指導

ろう児に対して数の概念を把握せしめるためにも、聴力が如何に重要であるかは、数少ない研究発表を通じてであるが窺える。

坂本氏¹³⁾は数の概念を形成せしめる為には、常に子供の考えに対する心理を理解して指導する事が必要であ

るとし、其の心理的発達段階を5つに分けている。即、未分化な漠然たる数意識しか持たない者、準数概念とも言うべきものを持つ者、言語障害による発達遅延している者などを挙げ、其の何れにおいても言語指導の機会に成るべく多く算数指導を行うべきであると。

下田氏¹⁴⁾は算数指導には思考力と計算力を習練せしめなければならない事、特に社会生活上、算数を必要とする点で、其の日常生活における問題を採り挙げると共に、其の数量関係の処理の正確さを導ぶべきであると。又、高木氏¹⁵⁾はろう児に対する算数教育は確実な数量的知識を日常生活に応用し、更に前進的科学的精神の育成に向わしむべきだと。

伊藤氏¹⁶⁾は精薄ろう児、中間児、学業特に言語力不振児などについては、其の能力や実態に応じた指導が必要である事を強調し、殊にろう児には中間児が多く、又、数生活の能力が非常に低い点を指摘している。

考察

算数指導に関する成果の如何は言語や国語の指導の進展と関連している。言語や国語の能力の上達の程度に左右される所が大きいようである。この点、前節に記した如く、我国におけるろう教育の発語主義に対する根本的な考え方についての検討の必要性が感じられる。

次に算数指導の上で特に強調したい事は、家庭での日常生活を通じて、其の保護者の積極的な指導協力を求める必要のある事である。

主な参考文献課題

- 1) 数概念を形成する一つのこころみ (坂本)
- 2) ろう児における数概念の形成について (坂本)
- 3) 私の考える算数教育 (下田)
- 4) ろう児と数学 (高木)
- 5) 私の歩んだ特別学級の算数指導法 (林)
- 6) 遅滞児の算数指導 (伊藤)

第三節 図工指導

出来上った図工製作品を觀賞するためには、確かに聴覚を必要としないが、其の図工品を作り出すまでの前階梯の図工指導ともなれば、視覚と共に聴覚を多分に必要とするものである。これ亦ろう児の場合には視覚にのみ訴えて指導しなければならないので、非常な苦勞を伴う事になる。

堀井氏¹⁷⁾はろう児は聴覚に替る視覚において普通児より遙に鋭敏な感覚を持っているだろうと考えていたが、実際は誤っていたと論じ、其の美的感覚の鈍い事を指摘して、ろう児には色彩感覚の訓練の大切な事を強調している。斎藤氏¹⁸⁾もろう児と普通児の作品を比較して、色彩の明度や彩度が原色的であり、又、単純化、省略化の

傾向を持ってあって平面的である。更に想像画になずみ叙事的表現形式になり易いと。尤も高学年に進むに従い模倣性を示して来るが、この様に客観性に乏しいのは、観察力や認識力に欠けているためだと。

尚、中村氏⁹⁾は美術史教育の立場から美術的視覚の開発の必要性を説いている。

考 察

図工製作を仕上げるのに必要な観察力や認識力、表現力などは、各般の指導や教科の連带的効果に俟たなければならないものである。従ってろう児が図工の上で既に本質的に不得手なものだとは言えないし、又、聴覚に替る視覚が反って鋭敏でなかったとの結果も、同様に本質的なものと考えなくて良いのではなからうか。

中村氏の言う美術的視覚の開発も、本質的に考えて必ずしも不可能とは考えられないので今後の研究に俟つものである。

主な参考文献課題

- 1) 低学年における色彩感覚訓練（堀井）
- 2) ろう児における図画指導の所感（斎藤）
- 3) 児童画の図柄についての考察（斎藤）
- 4) 児童画美術と創作の補助（斎藤）
- 5) 中学校・高等学校における美術史教育（中村）

第四節 律 唱 指 導

律唱指導においても、聴覚欠除のため、其の指導の困難性は極めて大きい。研究面でも種々の努力が重ねられているが、この困難性の壁を突き破るまでには至っていない。而も恐らくは言語指導以上に律唱指導は至難であるとも見られる。

律唱のリズムや音の高低は会得できても、其のメロディーやハーモニーの如き情操に響くものは理解せしめ難い。蓋しこれ等は視覚以外に特に聴覚に依る面が多いからである。

松宮氏¹⁾は色ピアノに関し、渡辺氏²⁾、勝間田氏³⁾は絵譜、図譜について、其の必要性や応用の限界を検討し、其の利点と不利点を挙げている。例えば絵譜の場合に音譜の代りとしては半拍以下のリズムに適しないし、又、歌詞の代りとしては絵が言葉と直接に繋がる場合にのみ使用し得る如きである。笠松氏⁴⁾は「律唱とは何か」と言う基本から論じて、感覚訓練 sense training の必要性を述べている。即、ろう教育での律唱とは耳の感覚を離れた視覚リズムに依り、舞踊、絵画、彫刻、建築、はては流行美などをも感ぜしめようとするものであり、又、客観的刺激に対する特質器官の周期的、反射的反応から生じる経験を与えるものであるとし、更にろう児も普通児と同様、人間としての美を求める感じや、生に対する

喜びを味わう気持を有する筈であり、これ等の感じや気持を引出し育てるためには、普通児に対するような感覚訓練を其のまま当てはめる事のできる場合と、然うでない場合とがあるので感覚訓練は単に律唱科のみの手段だけでなく、広く国語、社交舞踊、絵画などからも其の要素を引出して、ろう児に与えるべきであると。

佐藤氏⁵⁾はろう児の中に眠っている音楽的素養を目醒めさせ、児童本来の明るい生活面へ導くため、楽器による反復練習の必要性を強調し、併せて発語面への効果をも配慮すべきであると主張している。又、メロディーを体得せしめるためには補聴器による残存聴力の利用が有効であると。

玉井氏⁶⁾はろう児の音域を拡大せしめるため、感覚、特に視覚・聴覚などの陶冶、注視力及び模倣力の強化、リズム感の習得に努むべきであるとして、リズムと言語の相関々係を検討している。其の結果、リズムと言語、発語との相関々係が I. Q. との相関を上廻ると。

又、二宮氏¹⁰⁾ もリズム感覚の練習は発語指導に有効であるとして、拍手練習やバンド、律動遊戯の練習を推奨し、更に聴覚性注意の習慣形成や身体リズムの訓練の必要をも説いている。

考 察

ろう児に対しても律唱により音楽的情操の涵養と言語指導に役立てる事を目的としているが、ろう児では聴力欠損のため、音楽を空気振動或は触覚を通して単なる音の響きとして感知するに過ぎない。従ってリズムや或種の音の高低以外にメロディーやハーモニー、更に其の歌詞との結付きなどを感知せしめる事は、全く困難な事である。

この点律唱指導には音の伝達方法としての視覚、触覚の感覚組合せに、一段の工夫を必要とする。音を目に見えるようにする例えば映画やテレビ、オッシログラフなどの利用により目で視て音を感じる指導の研究が望まれる。

将来の夢としては音波と光波の脳神経でのエネルギー転換など医学者電気学者達の協同解決に期待をかけるものである。

主な参考文献課題

- 1) 色ピアノについて（松宮）
- 2) ろう児のための歌（渡辺）
- 3) 絵譜について（渡辺）
- 4) 入学1,2年のカリキュラム（大沢）
- 5) 律唱科指導の系統（門脇）
- 6) 本校におけるリズム指導の一分野（勝間田）
- 7) 律唱についての一考察（笠松）
- 8) 律唱科における器楽指導の具体案（佐藤）

- 9) 律唱指導の一方法 (玉井)
10) 本校における律唱科 (二宮)

第五節 職業指導

ろう教育の二大目標として言語教育と職業教育が挙げられる (吉田氏⁴⁾)。ろう教育における職業指導の目的は本人を良き社会人、良き職業人たらしめ、技術を通じて勤労の態度や精神を養わしめるためのものであると (木村氏¹⁾、滋賀ろう校²⁾)。又、坂本氏⁶⁾ はすべての人に愛される人間を造り挙げるべきだと言う。

藤田氏³⁾ は知識としての職業教育と技術としての職業指導を並行して行うべきものであると強調している。

其の実際取扱いとして、山内氏¹⁾ は小学部で興味、工夫、研究心と言う基本的なものを、日常生活に必要な図工や家庭の教科を通して教育し、中学部では職業経験として一般的な知識、技能を授け、高学部で専門的訓練並に卒業後の就職による職業生活に関する事柄を指導するものであると。

伊藤氏⁵⁾ は職業種類の選択が僅か数種類に局限され勝ちなろう児に対する職業指導のカリキュラムは、普通児の場合とは異なるべき性質のものであると主張している。坂本氏⁶⁾ は職業教育における修技^{ツラ}について論じ、音 (耳による正しい感覚教育)、面 (目による正しい感覚教育)、道 (無理のない様に自然に抗して行くための教育) の三つの練成を行い、技術の練磨と職業人としての性格陶冶に務めしめるべきだと。

為我井氏¹⁷⁾ によれば、国勢調査での職業種目 123 種に対しろう学校の職業科では 15 種に過ぎないとの事である。

伊藤氏⁹⁾ は職業教育としての指導の実態を調査し、大正年間末期では全国ろう学校職業科の種目は僅に 5 種、34 施設であったが、昭和 28 年度には 28 種、202 施設に及んでいる事は誠に喜ばしいが、職業部門の呼称の混乱指導時間数の不統一、学科と実習の不合理性、言語教育に偏っていて職業教育が添え物的である等の点を挙げ、職業教育を一定基準に迄統一するため、全国的或は地方ブロック的研究協議機関を持つべきだと結論している。

次にろう児に適性職業を見出すため内田・クレベリンの精神検査を、近畿地域のろう学校生について行い、特に本検査では従来言われているような、精薄児とろう児の平均曲線が近似しているとの結果は見られず、普通児なみであったとの報告が京都ろう校¹⁰⁾ から出ている。尤もろう児が自己の能力を充分に発揮し得る職業の種類は少い事は事実である。即、ろう児は職業的に順応性が低いと言える。

村田氏¹⁴⁾ は労働一般職業適性検査 (15種の検査中、11種が紙筆検査) を行い、ろう児は紙筆検査よりも器具検査が勝れていると。尤も抽象的精神活動の程度を、これ等の検査でろう児について掴む事は困難であり、又、言語能力の低さが検査上、知能、算数能力、書記的知覚などの性能得点を低下せしめていると考えられ、言語能力の向上こそ、ろう児の適性職業を拓め、円満な人格形成に不可欠なものと。又、一般に推理力が劣るが、視覚による図形の比較的弁別力は普通であると述べている。

次に竹ノ内氏¹⁴⁾ は職業指導上ろう児各人の健康の実態 (例えば身長、体重、胸囲、肺活量) などを調査し、各個人の姿を完全に掌握する事が有効であると。永田氏¹⁶⁾ は図画により美意識を通じての観察力、注意力、巧緻性、創造力或は色彩感覚が養われるものであるとし、為我井氏¹⁷⁾ は工作により意志の陶冶や態度、習慣の躰けが行われると。而もろう児の造形的本能と結びつけた言語教育が工夫されるべきだと言っている。

更に湯川氏¹⁸⁾ は中学部職業コースとしての木材工芸科教育の向上について、又、中森氏²³⁾ は手工科教材としての構成おりがみを指導し、創作性を与えると共に、物を大切に作る習慣を養わしめるのだと。

又、石井氏¹⁹⁾ は職業教育による社会性の認識を高めしめる観点から洋裁指導を論じ、穴かがりに要する時間的観察により、ろう児は普通職業人に劣るも練習によって職業人と同程度に近づけ得ると。佐藤氏²⁰⁾ は被服科指導には其れに関連する基礎的教科の反復練習が重要であるとし、又、ろう児の多数が原色を好むも、各人の生活環境により其の感覚に差が出て来ると言う。

渡辺氏²¹⁾ は理容科に関し、其の技術指導としては中学部で顔剃を、高等部で調髪を行わしめているが、これ等卒業生についての職業生活 3 年間の観察結果を要約し、自主性や創造力、永続性に欠陥のある事を指摘している。

萩島氏¹³⁾ は印刷科在籍ろう児について、其の文選能力を平かなや漢字別に調査し、指導の初期は急速に其の能力を増すが、或程度に至ると能力の進歩が停止し、平均文選速度毎分 10 字位で、熟練工の約 1/2 だと。而も文選作業の大部分は漢字であり、従って漢字の配列を暗記せしめて反射的に動作し得るよう導く事が必要であると述べている。

尚、山村氏²⁴⁾ は木材工芸に必要な塗料 (セラック、速乾ニス、ラッカー、コーパル等) の褪色耐久力に関しての研究発表をしている。職業教育における科学的基礎づけの重要性を示すものと言える。

考 察

ろう教育の二大目標の一つと言われる職業教育も、聴力欠損により其の修得に幾多の困難性を伴うものであるが、他の非具象的教科に比べれば、たとえ知能の上で低い者が多くても、其の効果を挙げ得る可能性はより大であると考えられる。ろう児の職業指導では聴覚以外の視覚、触覚、運動能力などに訴える面が可成り広いので、言語や読書の能力が欠損していても職業の種類によっては視覚による直観的に、或は手指による触感的に、理解し得るものもあるから、適性職業を選べば普通児と大差ない程度に職業に習熟し得る筈である。

この点、ろう児一人一人に適応した職を正しく発見する事に努めると共に、職業種目の開拓とより良き適性検査法の研究が期待される。

主な参考文献課題

- 1) 職業に関する教育について (木村), (山内)
- 2) 職業指導の基本問題 (滋賀ろう校)
- 3) 職業指導と職業社会人の育成 (藤岡)
- 4) ろう学校における職業教育 (吉田)
- 5) 職業を通した教育計画のあり方 (伊藤)
- 6) 職業教育における修技の要約 (坂本)
- 7) 我が校における職業教育の運営と実際
(新潟ろう校)
- 8) 本校中学部における職業指導の実際 (林)
- 9) ろう学校の職業教育 (指導) の実態に関する報告
(伊藤)
- 10) ろう児の適性職業に関する一実験的研究
(京都ろう校)
- 11) 職業適性検査 (村田)
- 12) 近畿地区ろう学校教育の実態 (同教育研究会)
- 13) ろう児の職業教育における測定評価方法の一例について (萩島)
- 14) 健康を基礎とした職業教育 (竹ノ内)
- 15) 職能訓練の指導体系 (森)
- 16) 職業教育の基礎としての図画について (永田)
- 17) 職業教育の基礎としての工作科 (為我井)
- 18) 中学部職業科のあり方、附、木材工芸科における最低必要量 (湯川)
- 19) 社会への位置づけより見たる職業科 (洋裁) の経営の一端 (石井)
- 20) 被服科指導の立場から見た基礎的諸能力について
(佐藤)
- 21) 理容科指導に関する一考察 (渡辺)
- 22) 本校理容科経営の実態 (下条)
- 23) 手工科教材としての「構成おりがみ」について
(中森)
- 24) 木材工芸における塗料の褪色耐久力に関する研究について (山村)

第四章 聴能教育に関する研究

残存聴力を訓練して聴能の向上に役立たしめようとする

る教育に関する研究も、数少ないところである。

森氏¹²⁾ は聴能訓練が全ろう児中での比較的少数と考えられる残聴児にだけ行われているが、其の訓練の本旨からすれば、寧ろ全ろう児を対象とすべきではないかと論じ、又、其の成果を一層挙げるために、難聴児の耳がどれだけ聞こえているかを測定し、高音部の欠損者が多い事や、聴力損失 80% 以下の者が約 1/3 ある事などを明らかにした。其の結果それぞれに応じた補聴器を与えて、聴力損失 80% 以下の者に対して訓練を行っている。尤も更に成果を高めるためにはこうした聴能訓練を幼児期から行うべきであると。

寺師氏¹³⁾ も入学時のテストにより聴力損失の程度をデシベルで示し、聴力の在り方を平均型、低音型、谷型などに分類している。而も積極的に音を聞こうとする態度が出来るのに 3 カ月から 10 カ月を要している。

辻本氏¹⁴⁾ は 60 デシベル以上の聴力損失児についての聴能訓練に、肉声、その他の自然音、或は振動感覚を通じ、又は増幅された音によって、補聴器を用いずに聞き分けしめるように努力している。例えば音楽ではレコードで音楽の始まりと終りを指示せしめるとか、4 拍子や 3 拍子をリズム運動に導いて遊戯せしめるとか、又、楽器を用いてリズムに合わせて演奏せしめるなどして、音を解釈する能力の向上、話し言葉の型の理解や、聞く事によって自分の声を調節する事が出来るようになった事、又、想像力や注意力、集中力や記憶力などが発達を見せた。更に情操が培われたり、特に呼吸の仕方に無理がなくなったと述べている。

笠松・辻本氏¹⁵⁾ も同様、其の効果として、話し言葉の型が一層理解し易くなった。又、読話と補聴器を併用した場合が成績が良く、更に子音を誤聴する生徒は高音減衰型に多いと報じている。

音源として江藤氏¹⁶⁾ は騒音、楽音、人声、動物の鳴き声を、又、寺師氏¹⁷⁾ は入学当初に太鼓を利用している。

尚、寺師氏¹⁸⁾ は聴能訓練に入る前に、音の実存性を教えたり、音に意味のある事や音を積極的に聞こうとする態度を養わしめるための準備が必要であると。

十時氏¹⁹⁾ は補聴器をかけた時とかけない時を比較するのに、オーディオグラムを用いている。更に楡井氏²⁰⁾ は聴能学級編成の必要性を強調しており、寺師氏²¹⁾ は個人差の条件が出来るだけ近似した者を集めて指導すべきだと主張している。

考 察

聴能教育が残聴児に対する聴能訓練を中心に行なっているのに対して、残聴児以外の者、即、全ろう児をも訓練の対象とすべきであるとの主張も見られるが、今日の

段階では残聴児について一層深く研究を進め、其の実態や効果の基礎づけを行い、然る上に高度のろう児に対する訓練のためのより良き補聴器の考慮と指導技術の上達を図る必要があり、かくて全ろう児に有効な聴能訓練の施される日の近く来る事を念願するものである。

主な参考文献課題

- 1) 聴能訓練の指導体系について (森)
- 2) 聴能訓練指導上の問題点 (森)
- 3) 入学一年目における聴能訓練 (寺師)
- 4) 入学初期における聴能訓練について (辻本)

- 5) 聴能訓練について——入学初期を主体として (江藤)
- 6) 聴能訓練の実際 (寺師)
- 7) 聴能訓練におけるレディネスと個人差 (寺師)
- 8) 聴能学級について (楡井)
- 9) 聴能訓練の効果について (笠松・辻本)
- 10) 補聴器の効果測定の一実験 (十時)

本編の文献整理に就ては内藤甫氏の協力を得た事を記して謝意を表します。 [未完]

(1959年6月10日受理)